

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：33909

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06713

研究課題名(和文)日本伝統絵画で幼児の「感覚の互換性」を活かす鑑賞教育法の実践的研究

研究課題名(英文)A practical study of appreciation education method which utilizes "Sensory compatibility" of infants in Japanese traditional painting

研究代表者

池永 真義(ikenaga, shingi)

至学館大学・健康科学部・准教授

研究者番号：50755965

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、幼児の表現の基礎となる鑑賞力を高める教育方法の開発である。その手立てとして、日本の伝統絵画を活用した。伝統絵画の活用で複数の感覚がつながり、能動的な鑑賞活動が可能になるという研究仮説を立てた。

そこで、学生と幼児を対象に、日本の伝統絵画を鑑賞させる実践を行った。その結果、感覚間相互作用を促進する作品には、工芸性、装飾性、反復性、単純性などの特質が顕著にみられることが明らかになった。特に工芸性および装飾性の高い作品には、視覚以外の触覚や身体感覚を活用する造形的要素が認められた。このように、日本の伝統絵画の幾つかが、幼児を対象とする鑑賞教育法として有効であることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The aim of the research is to develop an educational method to enhance the appreciation ability which is the foundation of the expression of young children. As a way to do that, I used traditional Japanese paintings. Therefore, I made a research hypothesis that multiple senses are connected by utilizing traditional paintings, and active viewing activities become possible. I tried to let students and young children view Japanese traditional paintings. As a result, it became clear that features such as craftiness, decorativeness, repetition and simplicity are remarkable in works promoting sensory interaction. Especially, it became clear that works with high craftwork and decorative effect make use of tactile and body sensation other than visual sense. In this way, it became clear that some of Japanese traditional paintings are effective as an appreciation education method for infants.

研究分野：美術鑑賞教育

キーワード：日本伝統絵画 感覚の互換性 鑑賞教育法

### 1. 研究開始当初の背景

(1) まず、研究当初の背景として、幼児教育における鑑賞教育の研究的・実践的脆弱さがあげられる。表現教育にかかわる実践が多くをしめ、表現活動の基盤となる「見る」ことの重要性が十分に認知されていない教育的現状があった。これが、本研究における問題意識を喚起した現状である。

(2) 次に、美術教育以外の領域（感性工学や認知科学、脳科学等）における、感覚研究の現状があげられる。従来の視覚や聴覚などの感覚別の研究から、感覚間相互作用（感覚の互換性）や共感覚研究など諸感覚を総合にとらえる研究が近年、進展している。ところが幼児教育では、それらの発想や研究成果を十分に取り入れてきたとは言えない現状がある。これが、本研究における問題意識に具体的な研究の方向性を与える契機となっている。

### 2. 研究の目的

研究の目的は、日本の伝統絵画を活用することで幼児の「感覚の互換性」（多感覚の相互作用）を促進し、表現の基礎となる鑑賞力が高められる教育方法の開発にある。日本の伝統絵画には、西洋絵画には乏しい幾つかの表現特質がある（たとえば工芸性等）。そこでそのような作品が潜在的にもつ特質を活かし、適時性のある支援によって、より能動的な鑑賞活動が可能になるのではないかという研究仮説を立てた。

### 3. 研究の方法

(1) 学習者にかかわる基礎研究として、大学生および幼児を対象に「鑑賞能力の発達段階」の様相を把握し、整理する。具体的にはパーソンズによる美的認知の発達段階論をもとに、5 レベルの発達段階に区分し、その様相を把握する。

(2) 教材にかかわる基礎研究として、模倣性、工芸性、平面性などの表現特質を持つ日本の伝統絵画の選定作業を行う。具体的には近世（安土桃山～江戸後期）を中心とする作品を収集し、作業を行う。

(3) 年少・年中・年長の幼児を対象に、日本の伝統絵画の鑑賞活動を実施した。対話型鑑賞やスクリーンや模造品、レプリカによる鑑賞等、また屏風や襖絵、絵巻などの形式もとりあげ、考察する。

(4) (3)の実践記録および結果を考察し、課題を明らかにし、その上で保育方法を改良し、再実践を実施する。

(5) (4)の再実践の記録及び結果を考察するとともに、それまでの研究成果を含めた総合的考察を行う。その考察から、今後の課題を

導く。

### 4. 研究成果

#### (1) 基礎研究（文献）の成果から

保育内容・領域表現では、音楽・描画・造形・身体表現等、あるいはそれらを組み合わせたりリズムなど、様々な表現方法が用いられる。保育の総合的性格から本来、幼児はこれらの表現手法を複合的に経験すること（多感覚の活用）が期待されている。にもかかわらず現場では、これらが独立した表現として個別に教えられる傾向がある。さらに鑑賞活動にいたっては、実践自体がきわめて少ない。

一方で、多感覚や感覚統合にかかわる研究は、感性科学や認知心理学等における感覚研究では珍しくない（丸山 1964, 佐々木・竹内・佐伯 1987, 岩宮 1992, 浅野・横澤 2012）。それらの研究は今日、感覚系別ごとの研究から感覚間相互作用もしくは統合的認知の研究へと踏み出している。また、物づくりに関わる工学系分野においても、人の感性に訴える物づくりの基盤として、複数の感覚刺激の統合性に焦点をあてた研究が進められている（たとえば、国分・伴・鳴海・谷川・廣瀬 2012, 長島 2014）。

このような他領域・学際的領域における基礎研究を通して、幼児の表現・鑑賞教育と他領域における感覚研究との相違点が明らかになったことが、第一の成果としてあげられる。

#### (2) 基礎研究（調査）の成果から

学習者にかかわる基礎研究として、大学生および幼児を対象に、「鑑賞能力の発達段階」の様相を把握することを試みた。具体的には、パーソンズ(Michael Parsons)の「美的体験の発達段階(1987)」による美的認知の発達段階論をもとに調査を行った（また、補完的理論として、ハウゼン(Abigail Housen)による発達段階も参照した）。

この段階では、近代の西洋絵画と東洋絵画を見せ、反応を探った。また、方法としては対話型の鑑賞活動を採用した。発話については、量的、質的、相互交渉の視点から分析した。量的分析では、内容語（名詞・動詞・形容詞）の数をカウントした。質的分析では、美的特性とみなされる語の抽出を行った。

その結果、量的分析では「(色が)きれいな(形が)おもしろい」などの形容詞の多用が大学生およびどの年齢の幼児にも見られ、量的分析では、「感情特性」を示す語が最も表出されやすいことが明らかになった。もっとも幼児の場合、自発的にこれらの語を表出することは少なく、こちらの能動的な働きかけが必要なケースが多かった。

くわえて、幼児は具体性のある絵画や写実的な絵画だけでなく、抽象的・装飾的な表現の絵画においても、空想的な物語の中で解釈をすること、「見立て」による解釈が顕著なこと、不思議に感じたことや疑問を発し、興味

をもつことが確認できた。大学生は幼児のような見方をするものは少なく、何が描かれているのか、どのような描かれ方をしているのか等について興味を示すケースが多かった。このように、一定の方法をふまえることで、幼児期においても絵画作品の鑑賞活動は十分に可能であること、また幼児の反応を喚起する絵画を用意することで、対話を介した鑑賞が成立し得る可能性を見出すことができた。

一方で、幼児の多くは日本の絵画よりも西洋絵画の方をより好む傾向が見られた。これは、色彩の鮮やかさやなどが影響しているように思われたが、具体的な要因は明らかにできなかった。いずれにせよ、本調査によって、幼児の美的認知（鑑賞能力の発達段階）の様相（傾向）が一定、明らかになったと考える。

### (3) 作品選定の成果から

幼児の鑑賞能力の傾向を把握するだけでなく、仮説的に日本の伝統絵画のどのような表現特質が、幼児の感覚の互換性（統合性）を導く可能性があるのかについて想定し、作品を選定する必要があった。そこで教材にかかわる基礎研究として、近世（安土桃山～江戸後期）を中心とする作品を収集し、作業を行った。

その結果、模倣性、平面性、反復性、物語性、工芸性およびその複合の六つの表現特質があることが確認できた。「模倣性」としては、中国の唐代絵画を模倣した「唐絵」を変容させた「やまと絵」などがあげられる。「平面性」では、古来日本の絵画全般にわたって見られる特質であり、奥行や立体感のない表現が多い。「反復性」としては、意匠性、文様性のある作品（洛中洛外図屏風など、すやり霞や源氏雲など）があげられ、江戸時代に数多く見られる。「工芸性」では、本来は料紙装飾や蒔絵などの工芸の意匠を絵画に転用した表現があげられる。金銀箔が画面に貼る、撒く、散らすといった工芸的手法を使った絵画がそれにあたる。それらは視覚というよりは触覚に訴えるものが多く、幼児の感覚・嗜好にあうことが予想された。

以上のような日本絵画がもつ表現特質をふまえ、数十点の作品を選定することで、具体的にどのような作品が幼児の感覚の互換性・統合を導きやすいのかを把握する基盤ができた。

### (4) 実践研究の成果から

幼児 20 名と小学生（低学年 5 名）を対象に、鑑賞活動の実践を行った。通常の保育カリキュラムの中では協力が得られなかったため、市に協力をいただき、幼児対象のワークショップ形式をとった。また、とりあげた作品は日本の伝統絵画だけでなく、西洋絵画（幼児が興味を持つと思われるトリックアートやシュールレアリスム絵画等）も数点とりあげた。理由は、日本の伝統絵画に対する反応（鑑

賞力の深まり）と比較することで、伝統絵画の固有性を明瞭にできると予測したからである。

とりあげた日本伝統絵画は、『洛中洛外図屏風』（作者不明）、『風神雷神図屏風』（俵屋宗達）、『破墨山水図』（雪舟）、『八つ橋図屏風』（尾形光琳）、『光明本尊図』（作者不明）、『海浜奇勝図屏風』（長沢芦雪）など、10 点、西洋絵画は『海辺に出現した顔と果物鉢の幻影』（ダリ）、『司書』（アルチンボルド）、『大使たち』（ホルバイン）等 5 点である。

幼児のため、事後のアンケート調査は難しいと判断したため、作品を見せながら、実践者が適宜、対話（問いかけ等）をはさみ、記録をとった。

活動後、パーソンズによる「美的認知の発達段階」を判定基準とし、記録内容をもとに質的分析を行った。パーソンズの鑑賞力の発達段階では、第 1 段階「単純な好き嫌い（好み）」、第 2 段階「主題（モチーフを含む）の美しさやリアリズム（写実）」、第 3 段階「表出性」、第 4 段階「媒体、フォルム、様式」、第 5 段階「価値判断（批評的鑑賞）」に区分される。本研究では、幼児が「どのような伝統絵画作品を好むのか」ではなく、「日本の伝統絵画がもつ表現特質は幼児の多感覚を促すのか」を明らかにする点にある。したがって幼児の作品の見方がパーソンズの段階論における第 4 段階「媒体、フォルム、様式」のレベルに相当すれば、ある一定その根拠が得られると考えた。

結果は、鑑賞した日本の伝統絵画 10 点中、『洛中洛外図屏風』、『八つ橋図屏風』、『海浜奇勝図屏風』の 3 点がもっとも幼児が反応を示した。その理由として、それらの絵画は他の絵画と比べて工芸性および反復性が強い表現特質があり、特に工芸性には触覚性、反復性には身体運動感覚といった視覚以外の諸感覚が働いたことが推察できた。また、西洋絵画に対する反応は、これら 3 点より低かった。考えられる理由として、これらは第 2 段階「主題の美しさやリアリズム（写実）」の表現特質が強く、視覚のみを働かせることで鑑賞できるため、幼児はさほど強い興味を示さなかったのではないかと、ということである。

### (5) 総合的考察・結論

本研究の目的は、幼児を対象に日本の伝統絵画を教材化し、幼児の多感覚（の相互作用）を誘発して鑑賞活動を促進する教育法の開発にあった。

ただ、鑑賞実践の考察から、幼児の表現活動における感覚の互換性についての調査も必要になることが推察された。理由は本来、表現と鑑賞は一体的関係にあるため、鑑賞実践だけではその教育法としての効果が不明瞭な点が拭えないと考えたからである。

そこで研究の後半では、表現領域で嗅覚刺激に基づく造形活動の実践を行った。草木等の匂いからイメージして表現する、香水の匂い

から想像したイメージを表現する等の実践から、嗅覚刺激が学習者のイメージ形成に影響を与えることが明らかにできた。

総じて、日本の伝統絵画が幼児の鑑賞活動にも有効であること、またそのような活動のプロセスにおいて、いくつかの感覚統合が見られた点で、教材・教育法としての可能性を示すことができたと考える。

なお、本研究における課題として、幼児の「記憶や思考」と鑑賞活動の関係の考察が十分でなかった点があげられる。記憶や思考は、鑑賞過程における input（みる）と output（言語化等）を媒介する働きであり、どのような感覚の統合性が活性化するのかについての検証は、今後さらなる研究が必要だと考える。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 件）

〔学会発表〕（計 件）

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

池永 真義 (IKENAGA, Shingi)

至学館大学健康科学部・准教授

研究者番号：5 0 7 5 5 9 6 5

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )